日本スポーツ社会学会だより

No.3　　1992.10.31.
発行　　日本スポーツ社会学会事務局
〒305　つくば市天王台1-1-1
筑波大学体育科学系
スポーツ社会学研究室内

Tel.　0298-53-6370
Fax.　0298-53-6507
振込口座：日本スポーツ社会学会事務局
宇都宮　9-43962

1.『スポーツ社会学研究』編集委員会より
2.第2回スポーツ社会学会大会開催のお知らせ
3.J.コークリー氏来日及び講演のお知らせ
4.M.チクセントミハイ氏来日及び講演のお知らせ
5.国際学会参加報告
6.寄稿「スポーツ感動の社会学のために」
7.国際学会情報

1.『スポーツ社会学研究』編集委員会より

第1回『スポーツ社会学研究』編集委員会の報告

日時　：1992年9月19日（土）15時～17時
場所　：奈良女子大学
出席者：伊藤、江刺（司会）、影山、菊（記録）、山口、田中（幹事補助、記録）

(1)議題

1)創刊号の編集方針の決定

2)依頼原稿の体裁

①創刊号の内容

(a)スポーツ社会学会設立総会時の講演

J.W.ロイ氏：講演の全文（英文）
解説（和文）を山口氏に依頼（400字×8枚）

田原氏：講演テープあるいは要旨から再現ー松村氏に依頼

(b)シンポジウム

井上　今村両氏に依頼

上記の特集論文は、各人刷り上がり8ページとする。ただし、1ページの字数は約1,700字とする。従って、刷り上がりの合計は、32ページとなる。

②投稿原稿

現在のところ、4論文、1書評が投稿されている。その総分量は、字数にして63,000字であり、刷り上がり40ページである。又、図表は19枚であり、刷り上がり10ページとなる。従って、刷り上がりの合計は、50ページとなる。

(2)業績リスト提出のお願い

創刊号に会員の業績リスト（印刷物として刊行された著書、論文等）を掲載する予定でおります。つきましては、別紙の形式（コピー可）で過去5年間に刊行された学術論文等を記載し、編集委員会　江刺までお送りください。
締切は、11月末日とします。

郵送先：〒630　奈良市北魚屋東町
奈良女子大学文学部体育学研究室
江刺　正吾
Tel.0742-20-3346

2. 第２回スポーツ社会学会大会開催のお知らせ
別紙開催要項及び地図をご参照ください。

3. J. コークリー氏来日及び講演のお知らせ
J. コークリー氏（コロラド大学社会学教授、同大学スポーツ・余暇研究センター所長）が来日し、各所で講演をされます。以下にそのスケジュールを記しますので、講演会等に参加を希望されます方は、世話人の方にご連絡ください。

11月14日（土）15時～16時30分、天理大学体育学部にて講演・懇親会
「米国の青少年スポーツについて」
世話人：小椋　博（天理大学）Tel. 07436-3-1515（内）6570

11月18・19日（水、木）愛知教育大学にて講演・懇親会
世話人：影山　健（愛知教育大学）Tel. 0566-36-3111（代表）

11月21日（土）17時～19時、東北大学文学部会議室にて講演・懇親会（日本体育学会宮城支部会主催、東北社会学会・東北アメリカ学会協力）
「アメリカにおける青少年のスポーツ」
モデレーター（通訳をかねて）：有馬哲夫氏（東北大学教養部、東北アメリカ学会会員）
世話人：中島　信博（東北大学）Tel. 022-222-1800（内）5462、5251
近藤　義忠（宮城教育大学）Tel. 022-214-3456

11月24～26日（火～木）福島県田島町、田島リゾートホテルにて講演・懇親会
Tel. 0241-64-2231
25日午前：講演、午後：「日本におけるスポーツ社会学」・「青少年のスポーツ」についての討論、大学院生の論文発表など。
26日は、エクスカーションの予定。
世話人：松村　和則（筑波大学）Tel. 0298-53-6378
根本　涼子（筑波大学大学院）Tel. 0298-56-5819

4.M.チクセントミハイ氏来日及び講演のお知らせ

M.チクセントミハイ氏（シカゴ大学行動科学部教授）が来日し、以下の予定で講演をされます。参加を希望される方は、今村　浩明（千葉大学）Tel.043-251-1111（内）2517までご連絡ください。なお、会場等準備の都合がございますのでレセプションに参加を希望されます方は、11月10日までにお知らせください。

11月18日（水）17時～18時、千葉大学教育学部（JR線西千葉駅下車）4号館4F
4413教室
「Sports, Education, Well-being」
18時～19時30分、懇親会（会費3,000円）

5.国際学会参加報告

(1)American Sociological Association 87th Annual Meeting（第87回アメリカ社会学会）に参加して

8月20日から24日まで、アメリカ合衆国のペンシルベニア州、ピッツバーグにて第87回アメリカ社会学会が開催された。大会は、参加者が3,915名、プログラムの頁数が192頁にも及ぶという巨大なものであった。スポーツ社会学関係で日本からの参加者は、筆者以外に、九州大学の金崎良三先生、在外研究員としてカナダのサイモンフレーザー大学に留学されている岡田猛先生（鹿児島大学）、それに筑波大学大学院の岡田君の3名であったと思う。Sport and Leisureのセッションは、コロラド大学のJay Coakley氏がオーガナイザーを務めており、以下のような発表が初日の午前と午後に行われた。

1. Social Elites in the Organaization and Regulation of Sport.
   Carole Case, University of Nevada.
2. Homophobia and Women's Sport: The Disempowerment of Athletets.
   Elaine M. Blinde and Diane E. Taub, Southern Illinois University.
3. Certifying Wildland Recreationists: Lessons from the Tragedy of the Commons.
   Deborah J. Chavez, U.S.Department of Agriculture Forest Service.
4. Ethnic Leisure Pursuits: The Participation Rates of Jamaicans, African Americans, Italians, and Other Whites.
   Dorceta E. Taylor, University of Toronto.
5. An Assessment of the Power of Parental Social Class, Cognitive Ability, and High School Athletic Participation to Predict Educational Attainment, Family Formation, and Psychological Well-Being: A Longitudinal Study of an 18-24 Age Cohort.

Elmer Spreitzer, Bowling Green State University.

6. A Social Network Analysis of Influences on Athletes to Play with Pain and Injuries.

Howard L. Nixon, Appalachian State University.

7. Winning One for the Gipper: Media, Power, and the Sport/War Metaphor in the Persian Gulf War.

Sue Curry Jansen, Muhlenberg College; Don Sabo, D'Youville College.

8. The Iron Grapplers of the Squared Circle: Stigma and the Moral Careers of Professional Wrestlers.

Steven P. Schacht, Southwest Missouri State University; Ronny E. Turner, Colorado State University.

このうち、1.は直前に発表が取り消され、3.は事前に学会に提出された発表要旨と発表の内容が異なっていた。こうした大雑把なところはあったにしても、ディベートのやり方を徹底してトレーニングされているためであろうが、討論は大変熱気に満ちたものであった。

スポーツやレジャー関係のセッションは初日で終了したため、残りの4日間は他のセッションに参加した。今年のテーマ"Sociology and the reconsturuction of society"を意識したものであったのか、ドラッグやアルコール、エイズ等の社会問題の関する発表が大変に多かった。著者はここ数年G.H.Meadに関心を寄せているのだが、夕暮れの街を紙コップを片手に徘徊する物乞いを目の当たりにしたとき、何ゆえMeadが精神を通じた社会の改革を述べなければならなかったのか、そして何ゆえ自らも社会改革運動に身を投じなければならなかったのか、その理由がよく理解できたような気がした。しかしながら、そのような光景はまた、社会問題の解決に社会学が未だ成功していないということを物語るものでもあり、学問の無力さに落胆もした。

最後に、学会やその他の社会勉強（観光ともいうらしい）を通じ最も強く感じたことは、「もう少し話せたらなあ」ということだった。どうやらこれから社会学と英会話のテキストが本棚に増えそうだ。

同学会の次回大会は、1993年8月13日から17日にかけて、フロリダ州、マイアミビーチにて開催されることが既に決定している。

山本 教人（九州大学健康科学センター）

(2)エスノメソドロジー25周年記念集会（Ethnomethodology：25years later ）
参加報告

１．　日程　８月１３日～１６日　於　ボストン　ベントリー・カレッジ
２．　この研究集会に参加したことによって、これまでとはかなり異なったエスノメソドロジー像を描くことができた。現地で垣間見たこのエスノメソドロジーの新しい姿を整理するために、Ｇ・サーサス[1]の整理を参考にしてみよう。彼は、エスノメソドロジーをトークとインターラクションの研究であるとして、現地の研究の方向性を次の四つに分類した。　（１）会話の構造そのもの(ex.　隣接対）の探求ex. Ｅ・シェグロフ　（２）従来の社会学で言う社会構造や制度（ex. 性差別）と会話の構造とを関係ずけるような探求ex. Ｄ・スミス、Ｄ・シンマーマン　（３）会話からなる相互行為の特徴（ex.ﾄﾞｷｭﾒﾝﾀﾘｰ･ﾒｿｯﾄﾞ）の探求　ex. Ｈ・サックス（４）ディスネス（あるものが事実としてそこにあるということ）を観察・報告可能な形に互いに描出していく姿を探求するワークの研究ex. Ｈ・ガーフィンケル
そして、こうした探求のそれぞれが独自の価値を持ち、どれかひとつだけが真のエスノメソドロジーだというのではないと主張した。しかし、彼の整理の隠当さの背後に、現在のエスノメソドロジーの多極化／揺れを見て取ることができる。
　一つには、エスノメソドロジーの理論的源泉の二つの方向性　Ａ）現象学的（Ｅ・フッサール、Ａ・シュッツに依拠するあるいはＭ・メルロ・ポンティの中に可能性を求める）方向性と　Ｂ）日常言語学派の哲学（Ｌ・ヴィトゲンシュタイン、Ｇ・ライル）に親和性を持つ方向性との対立であり、ここでのサーサスの整理では、現象学派は視野の外にあるように見える。ただし、両派の対立はまだ潜在しているようにも見え、日常言語学派の哲学に造詣が深いＷ・シャーロックの発表「テクノロジーの組織的形成」に対し、ガーフィンケルの弟子を自認し、自身、視覚障害者の世界を現象学的に研究しているＤ・グードは「君の研究はエスノメソドロジーといえるのか？」と攻撃を加え、それに対してシャーロックが「現実は、君が考えるよりずっと複雑なのだ。それを詳細に探求する必要がある。すぐに結果を求めず、もっと細部に注目しろ。」といった反論を行っていた。このやりとりが、概念が先行しがちで非・経験的な現象学派と相互行為の細部を経験的に探求しようとする日常言語学派という対立を示していると単純には言えないのかもしれない[2]が、ここがエスノメソドロジー内の揺れの第一の軸だと言えるだろう。
　エスノメソドロジー内での対立軸の二つ目としては、エスノメソドロジーと社会構造という論点があげられる。サーサスの整理を用いれば、方向性（２）とそれ以外との対立である。この研究集会中に、最も顕著に論難の対象になっていたのはＤ・スミスであった。彼女らの研究が、旧来の社会学のいう社会構造を括弧に括っていないとして、シェグロフ、シャーロック、クールター、リンチらの激しい攻撃があった。この対立は、日本でのエスノメソドロジーの実践が、その変革の対象である社会構造が実在物であることを含意せざるをえない解放的関心と強く結びついていること[3]を考えに入れると、日本の研究者にとって極めて興味深いことである。

その他印象に残ったことには、今回参加していたエスノメソドロジストには偏りがあるように見えること[4]、今集会の参加者の間ではシャーロック、クールター、シェグロフ、リンチ[5]らといった人々が中心的な人物であるように見えたことなどがある。

この研究集会に参加したことは、今後スポーツ社会学にエスノメソドロジーの視覚を持ち込んで研究を進めていこうと考えている私にとって、研究集団全体の流れをつかむうえで大きな意義を持つものであった。また、私の拙いヒアリング能力に基づいた拙い紹介が、学会員諸兄のエスノメソドロジー理解に寄与することができたら幸いである。

1)「コールとワーク」と題されたこの発表でのエスノメソドロジー像と、早稲田大学での講演「エスノメソドロジー：社会科学における新たな展開」（1989）で描かれたそれとには、想定された聴衆の違いにもよるものであろうが、その理論的源泉の説明に大きな違いがある。

2)むしろグードが既存のエスノメソドロジーを代表し、シャーロックの方がこれまでとは違った新しい方向性を探っているのだという見方をすることも可能であろう。

3)「性差別のエスノメソドロジー」（1984）江原、好井、山崎に代表される研究動向をさす。

4)今回ガーフィンケルは、心臓病を理由に参加しなっかった。現象学的色彩の濃いポルナーも欠席し、また、法廷のエスノメソドロジー研究者たちは、シンマーマン以外ひとりも参加していない。（その多くは7月の段階ではプログラムには名前があった。）

5)15日の夜に開かれたインフォーマルな酒宴でも、この4人が座の中心になっていた。サックスの思い出を中心にエスノメソドロジー創世期の様子が語られ、当時、せっかく入手できたガーフィンケルのミメオが、彼らにとって全くの謎であり、サックスの明快さによって初めてエスノメソドロジーのプログラムが理解できたという話をクールターがしていた。

岡田　光弘（筑波大学大学院）

6. スポーツ感動の社会学のために

近代社会の成立に伴ってそれとともに発展してきたスポーツは、私たちの日常生活の重要な位置を占めるようになっている。スポーツの制度化は、私たちのスポーツへの関与の機会を高める。スポーツへの関与の高まりは、直接的であれ間接的であれ、私たちにスポーツの感動を味わわせる機会をも高めることに通じている。しかし、私たちの深層意識にまで浸透したスポーツの制度化は、スポーツの感動を一定の方向に通路づける枠組として機能してもいる。

近代のスポーツは、「組織化と調練が絶えまなく強化されてゆく」とともに、「遊びのなかの最高の部分、最前の部分を失っている」と、ホイジンガはいう（ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中公文庫）。彼によれば、近代スポーツの発展は、遊びとスポーツの同質性にくさびを打ち込み、スポーツを遊びから遠ざかるものとして駆り立ててゆく。近代スポーツの全般的傾向は、遊びの縮小と世俗的なまじめ主義の拡大に特徴づけられ、健康や教育あるいは利益などという日常的価値に奉仕するものと化している。そのことは同時に、スポーツの価値を高めるために、遊びの価値を低下させる動きを伴うだろう。ホイジンガの主張は、そうした考え方の逆転に貫かれていることは言うまでもない。

ホイジンガの遊び論は「聖なる遊び」論である。彼は、遊びを根源的な生の範疇としてとらえ、その本質を「面白さ」に求めた。そして、そのなかにこそ「自由」があるという。彼のいう「美と神聖の遊び」は、「楽しむために遊ぶ」ことや日常生活の「休養、レクリエーションのために遊ぶ」ことを含みながら、それら以上の高次元な遊びの世界を示している。彼は、遊びの諸段階を区別しながらも、人間の遊びをその最高次に位置する「美と神聖の遊び」に統一し、その至高の遊びのなかにこそ、人間的意味の源泉を求めた。

ホイジンガの聖なる遊び論は、ある意味では「過去を賛美する人」的な側面があるとしても、理念型としての意味をもっている。それは、近代スポーツの世俗的まじめ主義の浸透を相対化するとともに、人間の生の根源にも通じる視点を示しているのではないだろうか。限界を突破する自由は、聖と美の世界をかいま見せるものがあろう。聖なる遊びとしてのスポーツは、近代スポーツのごく限られた一瞬にしか実現しないとしても、スポーツ感動をとらえる理論的可能性をもっている。

制度化の枠組のなかで生じるスポーツの感動は、自分や味方の勝利に意味を見い出ださせるように働く。世俗的なまじめ主義の支配は、内外の区別を前提とした日常意識を当たり前にさせる。勝てば喜び、負ければ悲しい（あるいは悔しい）。そうした感動は、作田啓一による拡大体験と溶解体験の区別に従えば（作田啓一「自己と外界」『創造の世界』25、小学館）、拡大的感動と呼べるものである。しかし、スポーツの感動には、それ以外のものも含まれている。敵であれ味方であれ、競技者が素晴らしいプレーをした時に生じる感動は、敵味方の区別を越えたものとなろう。時には、それは、亀山佳明がプロ野球を素材として論じたように、宗教的色彩を帯びるかも知れない（亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社）。こうした体験は溶解的感動に含められるだろう。

敵味方の区別を越えた感動をもたらすところには、勝敗を越えた意味の開示がある。あるいは、勝者にも敗北があり、敗者にも勝利があるかのように受け取らせる力があるだろう。藤田省三によれば、ブレヒトの詩を受けたベンヤミンは、スポーツに言及したものではないけれども、勝利と敗北の共有に意味をみいだそうとした、という（藤田省三『精神史的考察』平凡社）。勝利だけではなく敗北も獲得されたものであるからには、勝者にも敗者にも獲得と喪失の両面があることになり、表面的な勝敗を越えた意味の層が見い出されることになる。

スポーツは生き生きとした身体性のレベルをもつことによって、たとえ制度論的な意味づけにとらわれる場合でも、その背後に生成のレベルをもつ。「スポーツを見る感動」は、「スポーツする感動」とは異なるレベルにあるけれども、それと全く無縁というわけでもないだろう。社会学が、作田啓一が示したように、「制度が人間をつくる」という制度学であるとともに、「人間が制度をつくる」という人間学でもあるとするならば（作田啓一「人間の学としての社会学」『オルビス』7、甲南女子大学）、スポーツ社会学は生成論としても豊かな可能性を秘めている。

桐田　克利（香川大学）

7. 国際学会情報

・ The Association for the Study of Play (TASP), St. Paul, Minnesota, April 22-24, 1993. The deadline for papers is December 11, 1992.

・ North American Society for Sport History (NASSH), Albuquerque, New Mexico, May 28-June 1, 1993.

・ Internatinal Sports Science Conference, Singapore, June 9-11, 1993. For more information write to "The Secretariat", Singapore Sports Council, National Stadium, Kallang, Singapore 1439.

・ Intenatinal Committee for the Sociology of Sport (ICSS), Vienna, Austria, June 28-July 3, 1993.

・ XIII World Congress of Sociology, Bielefeld, Germany, July 18-23, 1993.